つにも大ていのことでないのです。

西南戰爭で、官軍の兵隊が、ガチャ〳〵とやつてゐる內に、西鄕方の拔刀隊が切り込んで來た、といふ話もあります。鐵砲を擊つよりも刀で斬りつける方が早かつたのだから、呑氣なものです。

細長いのは、中りをよくしてあるのではないのです。火藥の力で押し込むのだから、角からうと圓からうと、かまつたことではないのです。

丸ダマは物にあたればドシンとそこに止まるといつた具合だが、長ダマは堅いものにあたると、クル〳〵とはね廻ります。骨にあたると體內の見物だと心得、あつちへクルリ、こつちへクルリと、からだの傷を大きくして、癒りを遲くして、二度と戰場へ出て來られないやうにしてある意地の惡いタマに出來てゐるのです。

「一發のタマを以て兩方の耳を取るの法」といふ「考へもの」も出來るのです。

タマが一方の耳朶をさらつてから、クルリとうしろを廻つて、又一方の耳朶を取つて行くのです。そんなこともないことではないのです。

ある兵隊の頭にタマがあたりました。額にチャンとタマの入つた穴があります。しかし、その兵隊はピン〳〵してゐるのです。

頭へタマがあたつて助かる術はないのです。それにこの兵隊はケロリとしてゐるのです。どうしたことかと頭のうしろを見ると、タマのぬけ穴がありません。タマが頭の中に入つてゐるものとしたら、ピン〳〵なんかして居られるものではありません。

よく調べて見ると、タマが入つたことに間違ひないのだが、そのタマは餘程氣の弱い奴だつたと見え、入ると、頭が固かつたと見え——こんな時には頭の固い方がいゝのだが——すぐに反れて、骨と皮との間をぬけながら頭を一廻りして、又もとの穴から出て行つたのです。

百萬發撃つて、もう一遍といふわけには行かない奇ダン珍ダンです。

タマのいたづら

ところが、砲彈の阿兄(あにい)となると、さう生優しいわけには行かないのです。

「櫻井！　水はないか？」と、隣りのM中尉がいつたから、「あるよ」といつて、水筒へ手をかけると、もう中尉は死んでゐるのです。砲彈に一寸背中をかすられたのだが、肺が飛び出してゐました。

「水はないか？」といつた時、もう二三間前にタマが來てゐたのでせうが、無常迅速といふか、超無常迅速です。

ある少尉が居眠りをしてゐると、頭の上で砲彈が破裂しました。彈子はカーブをゑがいてむかふへ飛んだが、破片は眞直ぐに落ちて來て、少尉の首をスパ

リと落しました。處がその首が落ち切れないで、喉の皮一枚でブラン〳〵と時計の振子のやうにブラ下がつてゐるのです。喉の皮といふ奴は案外強いものだなと思つたのでした。

劍術の達人は、孟宗竹を皮だけ殘して斬るさうですが、餘程劍道達人の砲彈だつたと見え、喉の皮一枚を殘して首を斬り下ろしたのです。

南京で、ある兵が機關銃を撃つてゐるとき、敵の迫撃砲彈が飛んで來て、背中をかすつて行きました。頭は無事なのです。といふのは、ちやうどそのとき——一秒間の何分の一といふ瞬間に、機關銃に故障が起きて撃てなくなつたので、チョイと首を下げて銃を見たのです。そのとき迫撃砲のタマが飛んで來たのです。それで首の方は無事だつたのです。

砲彈の阿兄は、何しろやることがサバ〳〵してゐるが、鐵砲のタマはすることがこまかくチョコ〳〵と鼠小僧のやうな奴です。

ある伍長、「前へ！」と大きな口をあけたところへ、タマが左の頰から右の頰へ抜けました。セコンドで約束してやつても、さう旨く行くものではないのです。その時、口の中をモグ〳〵やつてゞもゐようものなら、口の中はメチャメチャです。幸ひと口を開けた時に通り抜けたのだから、何でもなかつたのでした。

ある少尉は、自慢の髯をタマに持つて行かれました。タマに目があるかと思ふほどです。「あいつは立派なヒゲをしてゐるから一つやつつけてやれ」といふわけでもないでせうが、ヒゲを半分だけ持つて行かれました。

腹を撃たれた人は大變です。乃木勝典中尉は無惨にも腹を撃たれて死んだのでした。

灯を消して

明治三十七年十一月三十日、柳樹房の夜は更けて行きました。柳樹房は第三軍司令部のあつたところです。そこは、乃木大將が最後の五ヶ月を暮されたところです。

大將はアンペラの上にあぐらをかいてゐられました。

外套の袖も通さず、ぢつと暗いなかに坐つてゐられました。

前には小さな机がすゑてあり、その上に一本の蠟燭が立つてゐます。そばにマツチが置いてあり、地圖が折疊んであります。

部屋の外には馬丁の鎌次郎が、何かゴト〳〵やつてゐました。

ヒュー〳〵と、風が窓を打つてゐます。

大將は蠟燭に火をつけないで、暗いなかに坐つてゐられました。
第一線の方には銃砲聲がさかんに聞えます。二百三高地方面の空は火事場のやうに燒けてゐます。
少し離れた參謀部のベルが、リリンとけたゝましく鳴りました。
電話器を耳にしたのが白井參謀中佐です。
「何ッ！　二百三高地方面、フム、何ッ、失敗！　全滅！　さうか――エッ！保典少尉が戰死したつて！」
これで電話が切れました。
中佐の目の前には黑い大きなものが突つ立つたやうになりました。時計を見るとやがて二時になるところです。
外には、ゾロ〳〵と靴音がつゞいてゐます。報告を受けとつた中佐は、ツカ〳〵と大將の部屋の前へ行つて、暖簾を上げて中をのぞきました。中は眞ッ暗

です。
「誰かな？」
大將の聲が暗い中から聞えました。
「ハ、白井であります」
「何か用かな？」
「戰況を申し上げに參りました」
「さうか」
かういふと、パッとマッチの火が光りました。
大將の顏が蒼白く映りました。そしてマッチの火を蠟燭に移されました。火がジリ〳〵と燃え上がりました。
大將は外套を後ろにぬぎすてゝ、膝を正されました。かういふ場合、大將は軍司令官として、キチンとした態度を取られたものです。報告を聞くのにあぐ

らをかいたりはされなかつたのです。チャンと坐り直し、手をひざの上に置いて、中佐の方へ向き直られました。

「戰況といふと！」

かうたづねられました。

「二百三高地方面で御座います。只今第一師團から電話がございまして、殘念ながら、又失敗に終つたといつてまゐりました」

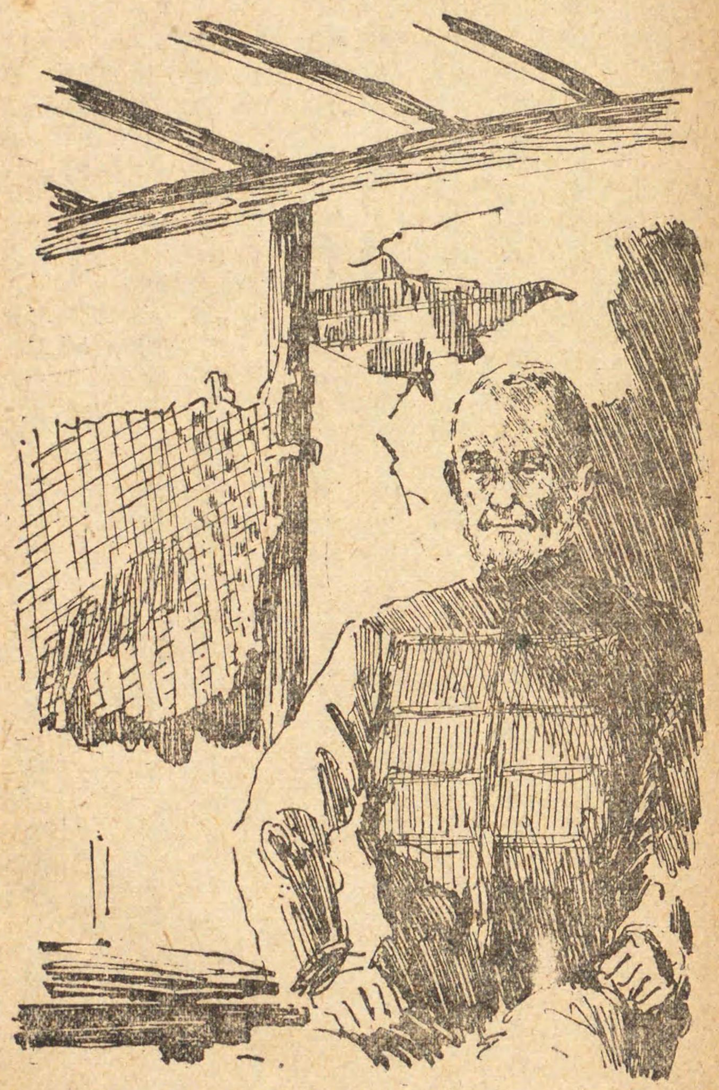
「失敗、――さうか――して、死傷者はどれくらゐありましたか？」

「まだはつきり判りませんが、直ぐ調べまして申し上げます」

「さうしてください」

蠟燭の火に照らされた大將の顔は、土色のやうでした。

「ハイ」と答へたまゝ、中佐はジツとそこへ佇んで居りました。まだいはなければならぬことが殘つてゐるのだが、それを口にしかねてゐるのです。



すると、大將は「もうそれだけですか」といはれました。中佐はそれを聞くと、喉から引き出されでもするやうに、――

「ハイ、それに御令息が御戰死になりました」と、いひました。

我ともなしに吐き出された言葉でした。

すると大將は、――

「保典が、さうですか――」

重ぐるしく、かういはれたと思ふと、弱々しい息を吹きながら、フツと蠟燭の火を消してしまはれました。

火を消されてしまつたのだから、中佐はどうすることも出來ず、外へ出て聲を放つて泣きました。

リンゴと保典少尉

保典少尉が戰死したとき、遺骨をビスケットのあき函（乾パンの函です）へ入れようとすると、それを聞かれた大將は、「どうして我兒にのみ手厚くするのか。幾萬戰死の枯骨をどうするのか」といはれたので、そのまゝにしました。死んだところへ置け。――それは大將のねがひでした。之を知つて泣かぬものはなかつたのでした。

保典戰死してのち五六日たつて、二百三高地を占領しました。

渡邊大佐が淋しくあとを守つてゐました。大佐も負傷して首に繃帶してゐました。粉雪が風に卷かれて、頭にふりそゝいでゐます。

大將が訪ねて來られました。我子の戰死したところです。金州に長男勝典の

跡を弔つたやうに、こゝでも保典を弔はれたのです。

大佐が、「このたびは――」

と、いひかけると、「もうそのことはいつてくれるな」と、いはれました。

「この山を取るまで、隨分たくさんの兵士を失ひました」

「――」

大將は默つてしまはれました。そして涙をバラ〳〵と落されました。

保典のことは「いつてくれるな」といはれ、たくさんの部下が死んだことを聞くと、涙が堰を切つて流れるのでした。

大佐は、もう保典少尉戰死のところを指ざす勇氣もなくなつたのでした。

赤く染まつた山の石、そこにちらばる鐵の破片、――死體、死體、――大將は胸も張り裂ける思ひでした。

山一面土も見えないくらゐでした。砲彈の破片でいつぱいでした。「鐵血山

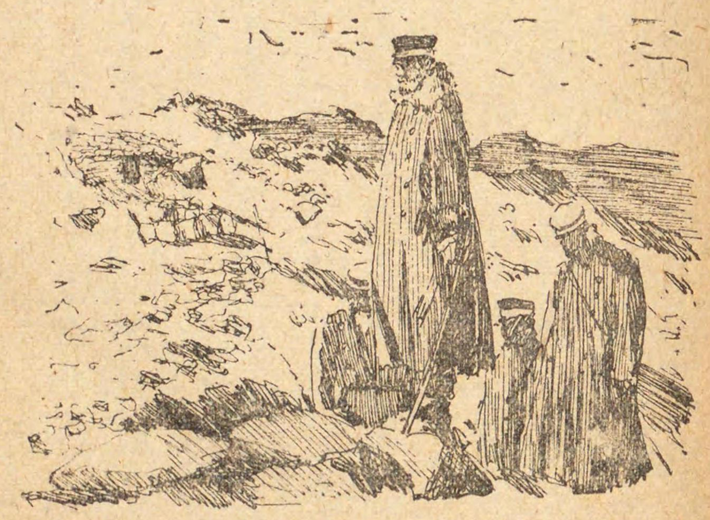
を覆し、山、形を改む」といふ詩のとほりです。

死體の上に死體を積み上げたのでした。

大將はいつまでも〳〵同じところに佇んで居られました。

保典少尉は、友安旅團長の副官でした。

勝典中尉が戰死してのち、保典少尉については、師團（第一師團）も氣を配つて、第一線へ立てまいとしようとしたのです。



それを聞いた少尉は、大將に、――

「私を師團司令部附にするやうな噂を聞きましたが、何の能もないものを、さやうなことをされては恥かしいし、又兄上のかたきを取りたいから、ぜひ第一線へ出して下さるやう、師團へ申付けて下され度」

と、いつた意味を申し出でました。（この書面は今も保存されてゐます）

「兄上のかたきを討ちたい」――何といふ美しい兄弟愛でせう。

大將も、少尉の健氣な心をどんなに喜ばれたでせう。少尉は、友安旅團長の副官になつたのでした。

十一月三十日（明治三十七年）の夜でした。（十二月一日の午前二時ころ）二百三高地にあつた少尉は、旅團長の命令を傳へるため飛び出しました。突擊の命令です。

突擊、突擊、突擊、――いくらくりかへし、卷きかへしても、成功しないのです。死體の山です。しかし、一人でも生きてゐる以上突擊、突擊です。

少しでも息をついたら、敵は逆襲して來ます。

少尉は出た切り、いくらたつても歸つて來ません。旅團長は心配して八方を探がさせましたが、とう〳〵歸つて來なかつたのです。

保典少尉戰死の姿を見屆けたものがあり、報告して來たので、もうどうすることもできなかつたのです。

今もそこに記念のしるしが立つてゐます。

大將は、その晩、ウト〳〵としたと思ふと、ハッと夢から覺めました。夢に保典少尉が來たのでした。

「第一線を離れて何しにこゝへ來た。早く歸れ。副官ともあるものが懸章（黃ろいたすき）を外して何たることか」

と、叱られたとき、ハッと目を開かれたのでした。

そこへ、白井中佐が、戰死のことを報告したのです。

そのときの大將の日誌に、——

十二月一日、朝、土城子ニ兒玉（源太郎大將）ヲ待ツ。來ラズ。
午食後、兒玉ト會ス。
兒玉、高崎山ヘ行ク、（高崎山は二百三高地の手前の山です）同夕刻下山ス。
白井中佐、保典戰死ノコトヲ告ゲ來ル。
東京ヨリ林檎二箱送リ來ル、一ツハ保典ノ分ナリ。
兒玉ニ林檎ヲ送ル。

と、あります。

兒玉大將は、北の戰場から來ました。落ちないので暗い顏をされてゐました。その前の晩（十一月三十日の夜）保典は戰死したのです。

東京の靜子夫人から、林檎を送つて來られ、「保典の分」としてあつても、そのとき保典亡し、何といふことでせう。

この二日こそ、血を吐くよりもつらい思ひでしたらう。

大將涙して

旅順は、明治三十八年一月一日、——元日に落ちたのでした。

滿洲事變（昭和六年）の最後の戰であつた錦州は、昭和七年の一月三日でした。

香港は、敵のお祝の日のクリスマス（十二月二十五日）に落したのでした。

一月一日や、三日といつためでたい日に敵の城を落したのでした。

一月一日、望臺砲臺へ突擊すると、それを最後に、旅順は白旗を上げて降服したのです。

捕虜は四萬二千二百五十七人、大砲一千百五十七門、小銃六萬一千百二十四挺、軍艦二十隻も取つたのでした。

一月五日、水師營で、乃木大將と、ステッセルとの會見があつたのです。そのとき、ステッセルは、大將に、勝典、保典戰死のおくやみをいひました。大將は「有難う。二人とも死んで滿足です」と、いはれました。

ステッセルは、その後、「今まで會つた人の中で、乃木大將ほど立派な人はない」と、いひました。

ステッセルも、なか〳〵立派な人だつたやうです。乃木大將が自刄されたとき、「モスクワの一僧侶」として、香奠がとゞきました。それはステッセルだつたのです。

ステッセルは、本國へ歸つて、死刑を宣告されたのでした。それを聞いた大將は、フランスにゐた津野田少佐（旅順のときの參謀）に、ステッセルの立場を書いて、フランスや、ドイツの新聞に出さされました。

「どんな要塞でも、しまひには陷落する。ステッセルは十分力を盡したので、最後まで戰つた」

と、いつたやうなことを詳しく書いたのでした。そのため、死刑をゆるされシベリアへ流されました。

ステッセルは、處々をさまよひ歩いたが、大將が自刄されるころはモスクワにゐたのでした。

大將は、ステッセルのいのちの恩人です。大將自刄のことを聞いて非常に悲しんだといふことです。一九一三年（前の世界戰爭の起る前の年）に死にました。

旅順が落ちると、その一月十一日に入城され、十四日に招魂祭を行はれました。大將は涙を流し〳〵祭文を讀まれました。

旅順開城の日の乃木大將の日誌には、——

明治三十八年一月一日、好晴。

午後二時過銃聲熾なり。拂曉、第九師團の一部H高地占領の報あり。

續いて望臺を攻撃、第九、第十一師團協力、午後占領。午後二時半

比敵の軍使來る、開城の事なり。夜、會議、規約書なる。

と、あります。

三十八年一月二十日、旅順を發つて、北、奉天へ向かひました。

奉天の大會戰では、グン〳〵ロシヤ軍をしめつけました。右より川村大將の鴨綠江軍、黑木第一軍、奧第二軍、野津第四軍、乃木第三軍の順序でした。

乃木軍は、ロシヤ軍のうしろへ〳〵と廻り、その喉首をおさへました。

ロシヤ軍は、どうすることもできず、退却しました。乃木軍のはたらきはめざましいものでした。旅順では、何となくジメ〳〵した戰さでしたが、奉天では大がかりな大膽な戰さでした。

大將は、「もう二箇師團もあれば、一人だつてのがすことぢやなかつた」といはれました。敵の三十五萬に對して、こちらは二十五萬、——十萬からのひらきがあつたのでした。

雪は降る、風はひどい。その中を大將は馬を飛ばして、グン〳〵押し込んで行かれました。「大風土を捲いて馬蹄輕し」です。

凱旋後の三十九年一月、大將は　天皇陛下へ復命書を奉りました。乃木軍の報告です。大將自身の書かれたものです。その中に、——

「彈ニ斃レ、劍ニ殪ルルモノ、皆　陛下ノ萬歲ヲ喚呼シ、欣然トシテ瞑目シタルハ、臣之ヲ伏奏セザラント欲スルモ能ハズ。然ルニ斯クノ如キ忠勇ノ將卒ヲ以テシテ、旅順ノ攻城ニハ半歲ノ長月日ヲ要シ多大ノ犧牲ヲ供シ」

と、あります。大將の思ひは、まことに腸を切る思ひでしたらう。また、

「顧ミテ戰死病歿者ニ此光榮ヲ分ツ能ハザルヲ傷ム」

と、あります。凱旋を分つことの出來ないことを、歎かれたのであります。大將は血を吐くの思ひでしたらう。

凱旋といふときの詩に、——

「我は愧づ、何の顏あつて父老に見えん。凱歌今日幾人か還る」

と、あります。多くの戰死者の親に合はす顏もない。出征の人、今日幾人生きて故郷に歸るか、といふ涙の詩です。

なさけの碑

アメリカ軍は、日本の負傷兵を虐殺したり、病院船を擊つたり、これが人間の皮をかむつてゐるといへるでせうか。人道の何のと口ぐせにする人間がこのありさまです。

戰つて死し、傷ついたものに同情するのは、日本の武士道です。支那兵や米英兵の墓を建てゝまで弔つてゐるのです。

乃木大將は、日露戰爭中も、死し、傷ついた敵をどんなに丁寧にされたか。

「敵も國のために戰つた勇士だ。力盡きたものは勞はつてやれ」といつて居られたのです。

「中華民國軍勇士之墓」とした墓を支那大陸でいくらも見られるのです。支那軍が立てたのではないのです。日本軍です。

十字架の墓は、マライにも、フィリッピンにも、ジャワにも立つてゐます。日本軍のやさしい心からです。

前の世界大戰で、フランスはドイツに對して、怨み拔いたのです。

勝ちながら、大きな碑を立てゝ、黑鷲（ドイツ）が、傷ついて落ちてゐるや

うな銅像を立てたり、「ドイツの罪悪的行爲はこの地に亡びたり」といふ記念碑を立てたり、戰爭がすんでからでも憎みとほしたのでした。

アメリカ軍の非道は、天の許すところではないのです。必ずそのさばきを受けなければならない日が來るのです。

日清戰爭の折、大山元帥は、金州に「清國軍人戰亡碑」といふものを立てられました。（支那はそのころ清（シン）といつてゐたのです）

乃木大將は、ところ〴〵に十字の墓を立てられたのでした。戰爭後政府の手で「旅順陣歿露軍將卒之碑」を立てました。これも、大將の深い思ひやりからであつたのです。

開城のとき、日本軍の戰死者が、黃金山に丁寧に埋葬してあつたことがわかりました。これをみてもステッセルはえらい人だつたやうです。

露軍のミスチェンコ騎兵團を向かふに廻した挺進隊の中の田村少尉が、晝は家にかくれ、夜は出て敵の圍をくゞつて、公主嶺に出たとき、敵と戰つて戰死したのでした。

そのとき、露軍は丁寧に埋めて、その上に、土饅頭をつくり、一尺角の高い墓標に、――「願くは、神は此英雄の靈に永久（とこしな）へに惠あれ」と、ロシヤ文で書いたのでした。

露軍でさへこれでした。米英軍など鬼畜のともがらです。

旅順の露軍の碑には「明治四十年十月大日本政府建之」としてあります。

その碑には、――

「嗚呼、不幸ニシテ戰場ニ一命ヲ隕（オト）ス者アランカ、タトヘ仇敵ト雖、之ヲ掩ヒ之ヲ埋ムルヲ以テ將（マサ）ニ本務トスベキナリ」

と、書いてあります。

米英軍など、これを讀んで何と思ふでせう。「神の國」だの、「平和の國」

だのと、口にしながら、世界をかきまぜ――、人間の道の何たるかを知らない奴ばらです。

旅順で、ロシヤ軍の戰死者は、一萬四千六百三十一人でした。

この忠魂碑が建つと、乃木大將はその除幕式に臨みました。露軍では乃木大將來る、と聞いて非常に喜んだのでした。

多情・無情

二臺の俥が山坂にかゝりました。

「もうすぐに高山（岐阜縣）でございます」

「さうか、そりや早く來た」

一臺の俥には乃木大將が乘つてゐます。別のはうには、北陸毎日新聞の記者

S氏が乘つて居るのです。

春といつても冷たい風が、谷合ひから吹き上がつて來ます。

大將は、金澤（石川縣）、富山（富山縣）を歩いてゐたのでした。こゝは第九師團のあるところで、旅順で戰つたのでした。

旅順で戰つたのは、第一、第七、第九、第十一師團と、後備旅團でした。

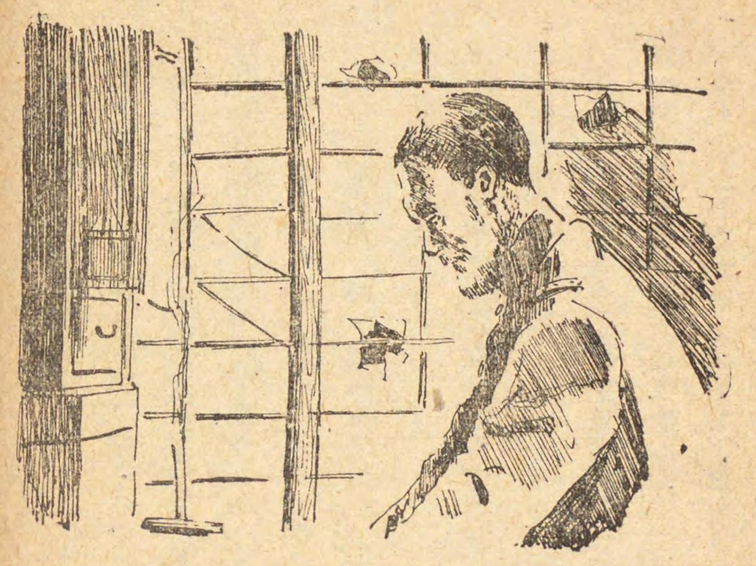
どの師團も大へんな死傷者でした。大將は、遺族をたづねて、第九師團へ行かれたのでした。

「乃木大將さまがいらして下さつた」

村長もビックリしました。

だれにも知らせてなかつたので、大さわぎです。大將は、村役場へ行つて遺族の家をきいて、墓まゐりをしたり、家を訪ねて行つたりされました。

「困ることがあつたら言つて下さいよ」



「何も困ることはございません」
「さうかな。遠慮なくいつて下さいよ」
「ハイ〳〵。大將さまがいらして下さつて悴もどんなに喜ぶかわかりませぬ」
「盤龍山だつたな。あすこはひどかつた。申しわけないことだつた」
「ナニ、悴め、立派に御奉公ができまして、こんなうれしいことはございません」
「さういつてくれると、乃木も恥しくなる。申しわけないことだつた」
大將は、そこ〳〵とたづねて行かれ

ました。そして、今、高山越えをしてゐるのでした。
「この谷はいゝ景色だのう」
「高山を越しますと、中山七里と申す溪谷がございます。飛驒自慢のところでございます」
「さう、聞いたことがある」
「山陽が耶馬溪を天下無し、と賞めましたが、中山七里は、何といつたらよいかと思つて居ります」
「天下無し、ではもういひやうがないのう」
「山陽が中山へ來たら何といつて賞めるかと思ひまして」
「えらい自慢ぢやの。結構々々」
「もう、見えました。あの煙突のあるところが高山でございます」
「さうか。日が暮れるかと思つたが、早かつた」

翌くる日の朝でした、高山外れで、S氏は、——

「閣下、こゝでお別れいたします。ごきげんよくお發ち下さいますやう。中山七里をほめて下さいますやうに」

「ハハハ。こゝで歸られるかの、それではご苦勞」

「ごきげんよろしく。ときに、閣下、こゝまでお伴いたしました記念に、——さやう、何もありませぬから、この手帖のはしに何か一言書いて下されますまいか」

「さうだの。——折角こゝまで來てくれたのだから、何か書かうかの」

「ありがたうございます。それではこゝへ。何も持ち合はせがございませんので」

S氏が、大將に鉛筆を渡すと、大將はジッと目をつむつてゐたが、——

「サア」

「一字でも結構でございます」

大將は、スラ〳〵と書いて、S氏に渡されました。

「ありがたうございます。——一滴千金、男子の涙、多情或は無情に似たるあり、——」

S氏の目からポロ〳〵と涙が落ちました。手帖に書いてある「一滴千金男子涙、多情或有似無情」の字が一字々々涙を持つてゐるやうに見えました。

「多情のわしも、無情の如く裝つてゐるのだ」とも取れるのです。

大將は、遺族を訪ねながらも、大將自身が遺族です。二人の子を失つてゐるのです。何で無情であるでせう。

S氏は、大將の顔を見ることも出來なかつたのでした。

「それでは」

「ハイ、ごきげんよく」

「ありがたう」

慈父の如し

大將は學習院長となられたのです。明治四十年一月でした。玉木先生が作つた乃木大將、――山鹿素行、吉田松陰が血となり肉となつてゐる大將が、校長として立たれたのです。明治天皇の渥い思召であつたのです。

初等科の生徒に與へた訓への中には、――

一、口を結べ。

二、キョロ〳〵してはいけない。

三、自分の家の紋や、先祖のことを忘れてはいけない。

四、男は男らしく、模樣のある風呂敷などを使つてはいけない。

五、人力車などに乘つてはいけない。

六、湯で顏を洗つてはいけない。

七、寒いときは暑いと思ひ、暑いときは寒いと思へ。

八、破れた着物は恥しいが、修繕してあるのは恥どころぢやない。

九、洋服や靴は大きく作れ。

などです。

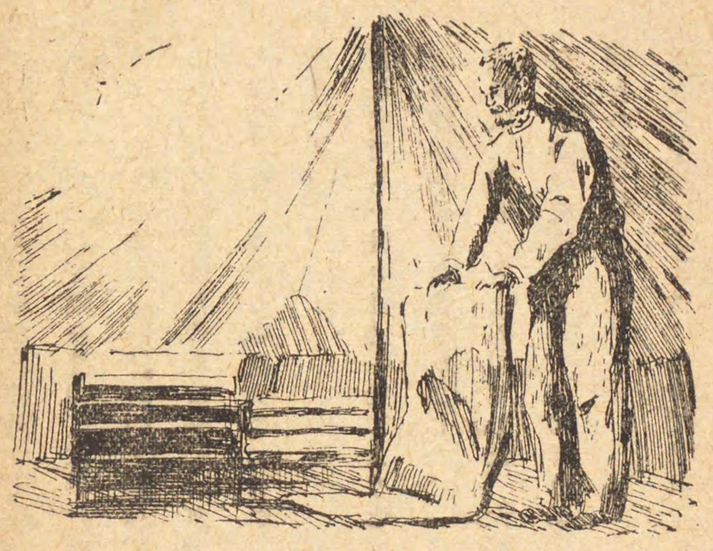
どこまでも「强い仕込」をしようといふのでした。

大將は寄宿舍住ひをされました。一日四十錢の賄です。

三間に二間の小さな部屋でした。大將は、身を以て手本を示されるのでした。

毎朝四時半に起きられ、例のやうに鹽でうがひされ、鎌をもつて道ばたの草を刈られたりしました。

毛布の上げ下ろしは、自身でされました。



生徒が腕時計をはめて、授業中にチョイ〳〵時計を見るのはよくないといはれました。

脚絆はいつでも持つて來ること。口笛を吹いてはいけない。大きな聲を出せ。足をしつかり踏め。昔の武士には歩法があつたものだ。ポケットに手を入れるな。紙屑をすてゝはいけない。机に肱をついたり、足を組んだりするな。といつたやうな細かいことまで氣をつけられたものです。

生徒の指をしらべて「こんなに爪を

のばして置いてはいけない。無性ではいけない。人に對しても禮儀でない」などと注意されたこともありました。

片瀬（神奈川縣）へは、水泳演習に毎年行かれました。大將の幕舍の跡といふのが今も片瀬に殘つてゐます。

幕舍は、五分板の板を並べて床にし、軍用行李と毛布二枚と、盥と藥罐だけで、陣中と同じ生活をされたのです。

こゝでも、午前四時半に起きて、書見をされました。海へ入るときは鉢卷をして、裸で飛び込まれました。

手紙は、模樣のないもので、白木綿を手拭の大きさに切つて使つて居られました。いつでもさうです。

ある日、大あらしがあつて、天幕も吹き飛ばされさうになつたが、大將はそのまゝジッとして居られました。

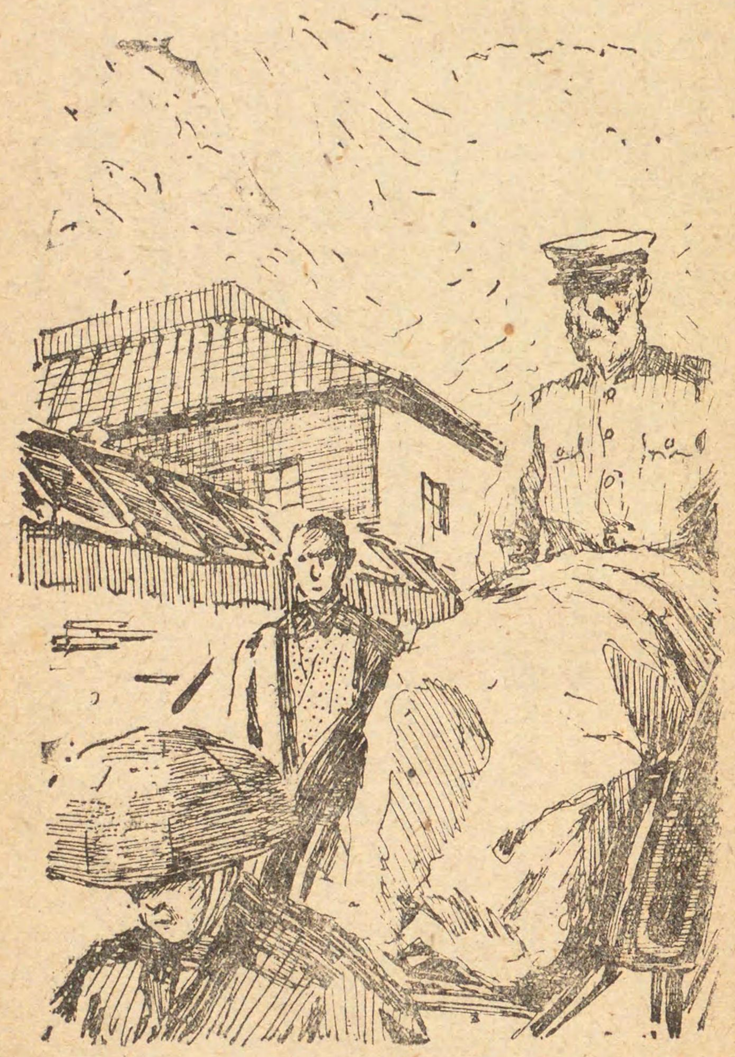
翌くる朝、「ゆうべは大あらしだつたのう。學生たちは、心配して避難したやうだつたが、自分は安心して天幕（テント）の中に居つた。テント（天道）人を殺さずといふ諺があるから」といつて、大笑ひをされました。

こんなあらしのときでも、海岸の天幕の中に居られました。師團長で演習に行つて、泊られるときでも、蒲團は着られなかつたのでした。外套を羽織つたまゝ横になつて居られたのです。

特別に御馳走をこしらへても、箸をつけられないくらゐでした。疊さへ貸して貰へばいゝといはれました。

車をとめて

戰爭から歸つた大將は、沈み勝ちの日が多くなりました。



ジッと一點を見つめてゐられるやうなことがありました。
無表情だと思はすやうなこともありました。ヒョウキンな面白いことを言つても、それがわざとらしく見えるのでした。
冷たいマントを冠つてゐるやうでした。
戰爭後大演習が久留米地方で行はれました。そのある日、大將は俥に乘つて、久留米の町を走らせてゐられました。その時、後ろから呼びとめるものがありました。ふり返つてみると、それは、青々館の主人でした。
青々館といふのは、久留米の宿屋で、大將がいつもヒイキにして泊つてゐられた家です。主人は自分の膳を持つて行つて、大將と一しよに食事をしたくらゐで、二人の女の子があつて、いつもお給仕をして居りました。
「ォ！　主人か、これはお久しう。こんどは統監部が宿を取つてくれたので、お前の家へ泊るわけに行かぬが、又この次ゆつくり昔話でもしよう」

「ハイ〳〵有難うございます。――それに閣下、このたびは申し上げやうもないことで、御令息樣が――」
と、いひかけると、大將は、手をふりながら、――
「そのことはいつてくれるな〳〵、時に子供たちは元氣かの」
と、たづねられました。
「有難うございます。元氣でございます。二人とも學校を卒業しまして」
「それは結構ぢや」
といつたと思ふと、大將の眼にチラッと光るものが見えました。それを見た主人は、「これはいふのではなかつた。息子さんたちが亡くなられたところへ、娘たちが元氣で幸福だといふことは、はしたないことをいつた」と、思つたがもうどうすることも出來ません。
大將は「子供たちによろしくいつてくれ、いづれ又逢はう」といつて俥を進

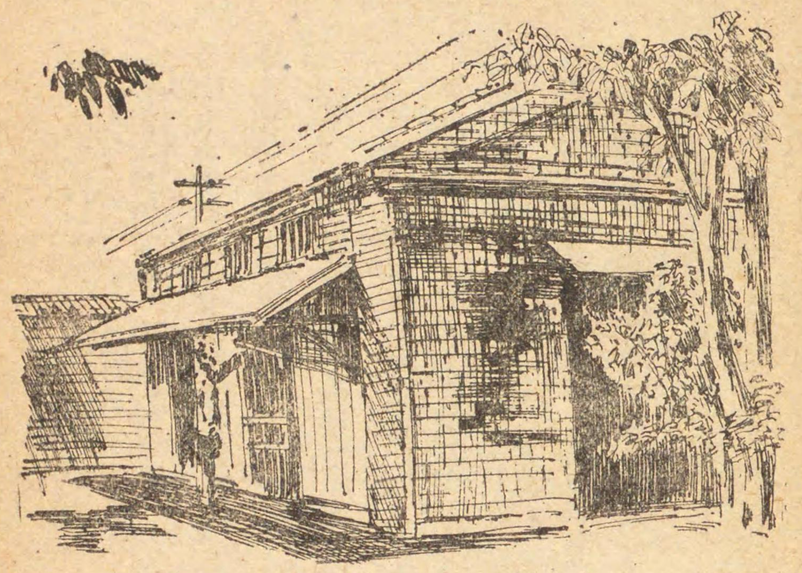
められました。

自分の子供のことをいはれた時は、手を振つて、何もいつてくれるなといはれながら、人の子供の話を聞くと涙ぐんだ大將、その心中のくるしさが目に見えるやうです。

夕方、鎌次郎をやつて、娘たちに金包を與へられました。

愛馬のわかれ

大將の最期に厩にゐた馬の中に「乃木號」といふのがゐました。それは「壽號」の仔です。「壽號」は、旅順を落したとき、要塞司令官ステッセルが大將に贈つた白い馬です。「壽」は、ステッセルの「ス」です。青山練兵場（今の神宮外苑）で、凱旋大觀兵式のあつたとき、明治天皇にお伴した馬はこの「壽號」でした。



「壽號」は、鳥取縣の佐伯といふ人に與へられました。佐伯は大へん馬を飼ふことが上手な人だつたので、「壽號」を立派に育てゝ貰ひ、主人（ステッセル）を失つたあと、安樂に暮させてやりたいといふつもりでした。

「壽號」は、幸福に暮しました。そして六十頭からの仔馬の親になりました。その中の一つが「乃木號」です。

ある日、大將は、佐伯氏の家へ行かれました。そして厩へ行つて「壽號」

に會はれました。

「お前も達者でいゝのう」

馬はあがきをしてよろこびました。人蔘を口へ持つて行かれると、大へんうれしさうな顔をしてたべました。

「元氣で暮せよ」

と、いつて別れました。

馬も別れが惜しかつたでせう。

大將が自刄される前の晩、大將は「乃木號」のところへ、カステラを盆にのせて持つて行かれました。

「乃木號」は、首を垂れたまゝ、たべようとしません。馬も大將の心を知つたのでせうか。

大將は、一旦家へ戻られたが、又出て行かれました。そして、カステラを口

へ入れてやると、こんどは、ムシャ〳〵とたべました。

「お前も元氣で暮せよ」

と、いはれたことでせう。

それが「乃木號」とも長い別れとなつたのです。

大將が自刄されたとき、「乃木號」にもわかつたのでせう。首を垂れて死んだやうになつてゐました。草も麥も口へ入れなかつたのでした。

ふびんに思はぬものはなかつたのです。

一生馬を可愛がられ、自分のことは切りつめても、ものいはぬ馬を勞はつて居られた大將です。

馬もどんなに悲しんだかわからないでせう。

このころ、大將は自分の部屋へ引つ込んで、しきりに手紙をしらべたり、引き裂いたりされました。

夫人も、ふだんのやうでないのを不思議に思つてゐられたのでした。

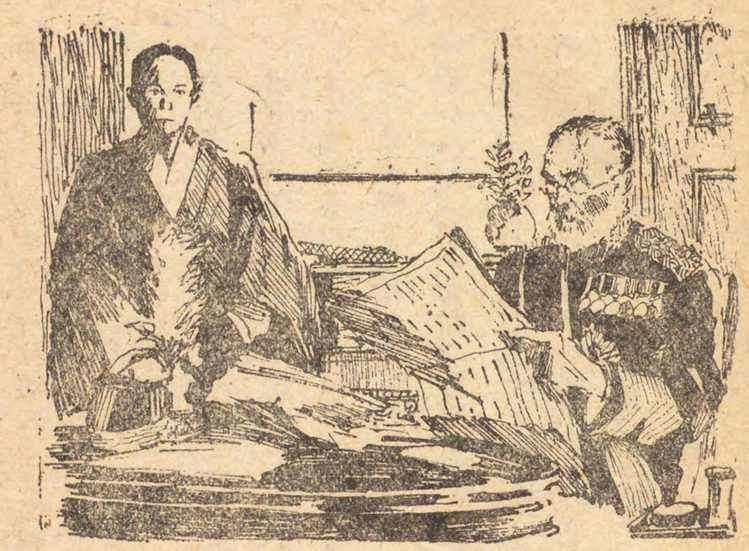
「よそから歸ると、三階の物置から書類を引きずり出し、紙屑ばかり作つてゐます」

と、夫人が人に話されたこともあります。

髮も髯ものびるまゝでした。

食事をされない日もあり、酒ものまれなかつたのでした。

それは自刄の前のことです。



しきりに、何か書きものをされる時もつゞきました。

九月六日（大正元年）自刄の一週間前には、學習院の生徒に、いろ〳〵と話をして、暗に別れの言葉をのこされました。まさかさういふことがあらうとはだれも思つてゐなかつたのでした。

八日には山縣元帥を訪ねられました。少年時代から、世話になつた元帥です。陸軍の長老である元帥に御禮やらお別れであつたのでした。

自刄の前の日――十二日――です。

その夜は、靜子夫人や、弟の周作や親戚のものと、蕎麥をたべて、面白い話などされました。

なか〳〵蕎麥を持つて來ないので、夫人が電話で催促されたところ、間違つて黑木大將の方へ蕎麥が行つてゐたことがわかりました。

大將が遺言狀を書かれたのはこの夜であつたのです。

十三日の日が來ました。その夜八時ころ、庭に祀つてある、祖先のお社に詣つて、最後のお別れをされました。

その朝、寫眞を玄關前と廣間で撮られたのでした。

夜の八時の針が廻らうといふときでした。夫人は二階から下へ下りて、葡萄酒を持つて上がられました。

しばらくすると、異樣の物音がしました。

そのとき大將と夫人は血の中に倒れられたのでした。

ア、、その日、——

夫人の短刀は長さ八寸ばかり、大阪の名工月山の作です。

自刃のとき、切先が三分ばかり折れました。胸の骨を刺されたとき折れたものらしいのです。

三度も刀を刺して、最後に心臟に當てゝ、その上に伏して自分の體重で死なれたらしいのです。

大將は腹に二本の刀創があり、頸動脈を切つてゐられました。

かくも立派に腹を二筋も切り、首をかき切つたといふものは少ないのです。

切腹の掟通り、腹を切つてから、その上を白木綿で卷いてゐられました。

草の旅順

古戰場には四十年といふ長い〳〵日がたちました。大將の苦しみ拔いた旅順の草も老いました。

長嶺子といふところに一本の柳の木が立つてゐました。そこは鐵道の終點で、內地から補充で來る者と、傷ついて國へかへる者とが、そこで別れをするところです。

私共がその柳の木の下に休んで居ると、汽車から降りた補充兵達が、心當りの人が無事かどうかとたづねるのです。あの人も死んだ、この人も死んだ、といふことを聞くと、折角賴りにして來た人が、もう此の世の人でないといふことを聞いてがつかりしてゐるのです。

「これは出發の時もらつて來た餞別だから」といつては、負傷兵の口へ入れてやつたり、負傷兵の方で、「內地へ何か言づけはないか」といふと、「旅順の方へ行つた、と話してやつて下さい」などと、戰場から歸る者と、戰場に來る者とが、この一本の柳の下でかうして別れをするのです。

柳の葉が黃ばんでも、旅順はビクともしなかつた、雪が降つてもビクともしなかつた、と思ふと、この木の下で別れた人が、今日幾人生き殘つて當時のことを思ひ出すことでせう。私共は一本の柳にもさうした悲しい思ひ出がつゞくのです。

私はフランスのヴェルダンの古戰場を訪ねました。こはれた砲臺の上に立つたとき、旅順の日のことを思ひ出して、覺えず涙ぐんだのでした。

ヴェルダンはペタン元帥が、ドイツ軍を防いだところで、ドイツ軍だけでも七十五萬からの死傷者を出したところです。

バリで私が世話になつた女中があります。彼女はバリの北二十里のアラスの生まれで、母と兄と三人で暮してゐたが、戰爭で兄は召されて出征し、戰爭が終つても歸つて來なかつたのです。

彼女は仕方なく、バリへ出て皿洗ひになつたのです。何年かの後、兄はヴェルダンで戰死したといふことがわかつたので、彼女はヴェルダンを訪れ、草の上にひざまづいて、「兄さんのことはいつまでも忘れません」といつて泣いたといふことです。

日露戰爭後四十年、五十年、百年、たとへ何百年たつても、この思ひは變るところはないのです。

支那事變となり、大東亞戰爭となり、戰死した人たちのことを思ふと、われ〳〵は心からお禮を申さなければなりません。と共に、われ〳〵は地下に眠つた人たちへの誓ひを忘れてはならないのです。地下の人たちは、——

「自分のなし得なかつたことを、君たちで仕遂げてくれ」

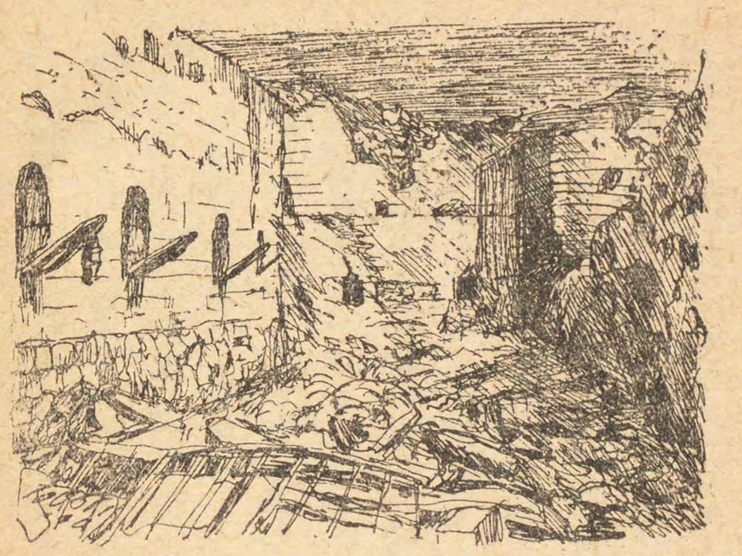
と、叫んでゐるにちがひないのです。

乃木苦の花

旅順の山の上には、血のやうに赤い撫子や、われもかうの花が咲き亂れてゐるのです。われもかうは「吾木香」と書くのだが、それを、私共は「我亦紅」といふ字で考へるのです。「吾も亦紅なり」です。戰場にふさはしい名の花が咲き亂れてゐるのです。

紫の色の濃い野菊の花が咲き亂れてゐます。それを「野の菊」でなく、乃木さんが苦しんだ——「乃木苦」の花と思つてゐました。

雨の降りあがりのある日、古戰場へ行くと、草の間から骸骨がころげ出てゐ



ました。その頭蓋骨にネヂ鉢巻が腐りついてゐるのです。私はその前に立つて默禮しながら、勇士が頭にネヂ鉢巻をして突撃した面影が、目に見えるのでした。

また襦袢の白い石ボタンが雨の流れたあとに點々と白く浮き出てゐるのを見て涙ぐんだのです。當年の人はもはや跡方もなくなり、白いボタンのみが戰場に殘されてゐるのです。

突撃の前夜でした。眞暗な晩でした。私の天幕の隣りの天幕で話し聲が聞え

ました。それはその日戰場へ着いた補充兵で、まだ戰さの味を知らないのです。

「上等兵殿、もう突撃の命令が下りましたか？」

「ウム、あつた、あすの朝は突撃だ」

「すると、もうこゝへは歸れませんか？」

「歸るどころではない。明日の朝はお互に戰死だぞ。それがどうしたか？」

「それなら襦袢を着かへさして下さい」

「いゝとも、いゝとも」

やがてガサ〳〵と天幕からはひ出た者がありました。

私が天幕から顔を出すと、その補充兵が背嚢を持つて外へ出て、蓋をあけて中から白い布を引きずり出しました。

上等兵も顔を出して、「それは何か」といふと、補充兵は、手をガタ〳〵ふ

るはせながら、——

「これは私が國を立ちます時に、母親が呉れた襦袢であります。母親がいひますことに、お前が死ぬる時にはこれを着て死んでくれ、といつて私にくれました。あすの朝の突撃に、私は母がくれた此の襦袢を着て　天皇陛下の御ために立派に戰死いたします」

と、いひました。

私はそれを聞いて涙を流しました。上等兵も、「さうかお前はそれを着て戰死するか」と、いつたまゝ涙を流しましたが、その後、旅順を訪ねた時、フト錆ついた懐爐のカラが落ちてゐるのを見て、これも母親の恩愛の片身でもあらう、これを懐にして居つた人は、今日は、もはやこの世にはゐないであらう、と思ふと涙を落しました。

かうして長い〳〵日がたちました。新しき涙を墓前へそゝぐ人もありませう。

古き日の傷に惱む人もありませう。古戰場の草は生えて枯れ、枯れては生えゝ草より草へと、長い〳〵旅をつゞけてゐるのです。

涙で戰つた乃木大將も、早や亡くなられてから三十一年といふ長い日が經つたのです。

（をはり）

大將の一生

歳	時	略歴
一歳	嘉永二年	十一月十一日、東京、麻布、日下窪、長州毛利侯上屋敷にて生まれた。乃木希次の三男である。無人（なきと）といつた。のち源三また文藏となつた。
十歳	安政五年	父閉門（百日）のため、長門（山口縣）豐浦へ移つた。
十一歳	安政六年	武家の禮法、弓、馬、漢學を學んだ。
十三歳	文久元年	兵學の學問を始め、洋式砲術を學んだ。
十四歳	文久二年	寶藏院流の槍術、田宮流の劍術を學んだ。
十六歳	元治元年	三月、萩に至つて、玉木文之進について學問した。

十七歲	慶應　元年	栗栖又助について、一刀流の劍道を學んだ。九月から、明倫館の文學寮に通學した。
十八歲	慶應　二年	豐浦に歸り、山砲（一門）の長として報國隊に入り山縣狂介（有朋、元帥）の指揮を受け、小倉地方に戰つた。足に負傷した。
二十歲	慶應　四年	一刀流の目錄を受けた。立派な劍道の先生となつた。
二十一歲	明治　二年	伏見御親兵々營に至つて、フランス式の調練を練習した。
二十二歲	明治　三年	京都にて御親兵練武掛を命ぜられた。
二十三歲	明治　四年	一月、陸軍練兵教官となつた。一月、陸軍少佐に任ぜられた。この年希典と改名した。
二十六歲	明治　七年	陸軍卿傳令（副官の如き役）となつた。

二十七歲	明治　八年	熊本鎭臺下、歩兵第十四聯隊（小倉）の聯隊長心得となつた。
二十九歲	明治　十年	明治十年役である。足に負傷した。三月、陸軍中佐となつた。熊本鎭臺參謀となつた。
三十歲	明治　十一年	一月二十六日、歩兵第一聯隊長となつた。九月三日、舊薩摩藩士湯地定之の女、靜子と結婚した。
三十一歲	明治　十二年	八月二十八日、勝典が生まれた。
三十二歲	明治　十三年	四月、陸軍歩兵大佐となつた。
三十三歲	明治　十四年	十二月十六日、保典が生まれた。
三十五歲	明治　十六年	二月、東京鎭臺參謀長となつた。

三十七歲	明治十八年	五月陸軍少將に。歩兵第十一旅團長となつた。
三十八歲	明治十九年	ドイツへ留學。(二十一年歸朝した)。
四十一歲	明治二十二年	三月、近衞歩兵第二旅團長に。
四十二歲	明治二十三年	七月、歩兵第五旅團長に。
四十四歲	明治二十五年	二年、休職。十二月、歩兵第一旅團長に。
四十六歲	明治二十七年	日清戰爭である。九月東京出發、十月、上陸し、旅順、蓋平等に戰つた。
四十七歲	明治二十八年	四月、陸軍中將となり、第二師團長に。八月男爵となつた。十月、臺灣守備隊司令官となつた。

四十八歲	明治二十九年	四月、凱旋して仙臺(第二師團)へ歸つた。十月、臺灣總督に任ぜられた。
五十歲	明治三十一年	二月休職。十月第十一師團長となつた。
五十三歲	明治三十四年	三十三年、北清事變である。三十四年五月、休職となつた。
五十六歲	明治三十七年	日露戰爭である。二月五日動員、留守近衞師團長に。五月第三軍々司令官に。六月六日、上陸、陸軍大將に任ぜられた。旅順に戰つた。
五十七歲	明治三十八年	一月一日旅順を占領。五日開城談判。一月十一日入城。一月二十四日旅順を發して北へ進んだ。三月奉天會戰。
五十八歲	明治三十九年	一月、宇品上陸凱旋した。四月、功一級を賜はつた。
五十九歲	明治四十年	學習院長となつた。九月伯爵を賜はつた。

六十歲	明治四十一年
	旅順の奉忠塔が出來たので、東郷大將と共に旅順へ行つた。
六十三歲	明治四十四年
	英國皇帝戴冠式のため、依仁親王殿下の隨員として、東郷大將と共にイギリスへ行つた。
六十四歲	大正元年
	明治天皇御大葬の夜、八時、（宮城御發の時間）靜子夫人と共におあとを慕ひ奉つて自刃した。

著者の略歷

明治三十三年六月少尉に任官す
大正十三年より七ヶ年間陸軍省新聞班長勤務
昭和五年八月陸軍少將となる
主なる著書に肉彈（丁未出版社）・銃後（丁未出版社）・草に祈る（朝日新聞社）等あり

昭和十八年四月五日初版印刷
昭和十八年四月廿五日初版發行
〔八、〇〇〇部〕
定價壹圓六十錢

乃木大將

著者　櫻井忠溫（さくらゐちゆうおん）
東京市日本橋區通三ノ六
發行者　今村源三郎
東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社
東京市牛込區山吹町一九八
印刷者　內田作之輔
發行所　偕成社
東京市日本橋區通三ノ六
電話日本橋（24）〇二三五番
振替東京一三五二番

出版文協承認あ 470483
會員番號 106005

出文協推薦

熊澤蕃山

和田傳著

藤樹先生を慕ひ軒下に寢ねて勉學し德を天下に謳はれた蕃山、飢民を救ひ信念の實踐に身を捧げた熱と意志の偉人傳。　價一・六〇

殉國の人

吉田松陰

池田宣政著

先覺者・松陰先生、海外渡航の雄圖に破れ尊皇の大義に殉じ、波瀾と受難の道にたふれた烈火の如き憂國の生涯を描く。　價一・七〇

文部省推薦

太田恭三郎

野村愛正著

二十餘歳の一青年が、數千の同胞を率ゐ幾多の天嶮と戰つてダバオの曠野を開き英米人を怖れしめた血と涙の開拓物語。　價一・六〇

平田篤胤

伊藤永之介著

金一兩を懐に飄然江戸に來り、火の番、飯炊等の苦難を經て國學の泰斗となる。その憂國の熱情を描いた人間篤胤傳。　價一・五〇

北條時宗

貴山司治著

未曾有の大國難、外敵の襲來に身をもつて當り遂に元軍を擊退した剛毅不屈の日本武士・相模太郎の熱血あふるゝ生涯。　價一・六〇

源義經

佐藤一英著

おごる平家を壇ノ浦の戰に亡した勇名轟く若武者義經が、兄頼朝に追はれ雪の北國へ落ちのびるまでの悲壯極まる物語。　價一・六〇

西郷隆盛

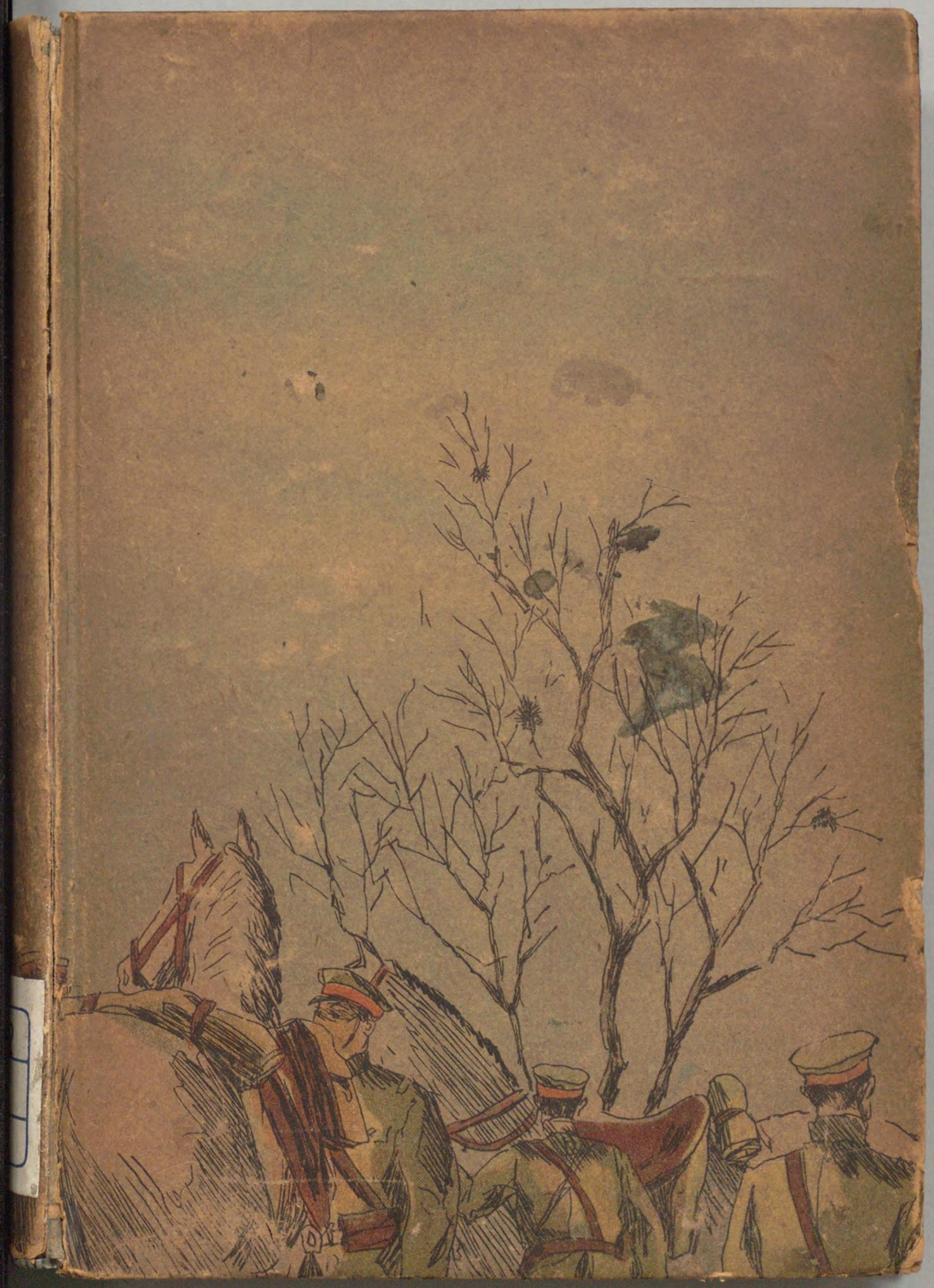
高垣眸著

幕府三百年の暗雲を拂ひ維新の大業を成就した熱血の人・南洲、只國を思ふ一念に生きた偉人の波瀾極りなき一生。　價一・五〇

豐臣秀吉

野村愛正著

機智縱横の戰略を以て諸國を治め、大明遠征の大事業を志した秀吉の大陸雄飛と國體尊嚴の心及びその人間愛を描く。　價一・七〇

各冊送料十五錢

952
143